

領域「言葉」と教科「国語」の関係性と指導法 — 養成課程の学生の意識 —

山田 丈美¹⁾

The Relationship and The Teaching Method between The Area “Language” and The Subject “Japanese Language” — The Consciousness of College Students in The Training Course —

Takemi YAMADA

本稿では、保育・幼児教育の「ねらい」及び「内容」について示されている5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の中の「言葉」と、小学校教育の教科としての「国語」との関係性と指導法について解明を試みた。具体的には、保・幼・小の指導者の養成課程にある学生を対象として、領域「言葉」と教科「国語」に対する捉え方、また共通して取り上げられることの多い「おおきなかぶ」の指導法について調査、分析した。これにより、現在、保育・幼児教育と小学校教育について学ぶ学生の視点から、領域「言葉」と教科「国語」の共通点や差異点を明らかにし、その調査結果から、今後の幼小連携のあり方についての示唆を得ることができた。

キーワード：領域 教科 言葉 国語 養成課程

はじめに

保育・幼児教育においては、平成29(2017)年に、「保育所保育指針」(厚生労働省)・「幼稚園教育要領」(文部科学省)・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(内閣府・文部科学省)が告示された。「幼稚園教育要領」の前文の最後の一文には、「小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなることを期待して」(p.4)との文言がある。ここで述べられているように、乳幼児期の発達段階を切り取って指導にあたるだけでなく、「小学校以降の教育や生涯にわたる学習つながり」の観点から大局的意に捉えることが必要である。そこから、人生の基盤づくりとなる真に必要な教育の在り方が見えてくると考える。

平成29(2017)年には、小学校教育の柱となる「小

学校学習指導要領」(文部科学省)も告示された。総則第1章第2の4「学校段階等間の接続」では、幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実に触れられており、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』では、以下のように解説されている。

低学年における教育課程全体を見渡して、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるように工夫する必要がある。特に、小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。(p.74)

ここで触れられているように、幼小連携の見地か

1) 教育学部子ども教育学科

ら、スタートカリキュラムは重要なつなぎ目としての役割を担うことになる。前掲文では「生活科を中心に」とされているが、すべての教科の基盤となる言葉の教育を担う国語科の役割も大きいと考える。そこで、本研究では、保育・幼児教育における領域「言葉」と、小学校教育における教科「国語」の双方に着目していくこととする。

1 目的

本研究では、領域「言葉」と教科「国語」の関係性と指導法に関する検討を行うことを目的とする。特に、現在養成課程に在籍し、将来、保育・幼児教育・小学校教育のいずれかの現場で指導に携わる可能性のある学生達が、領域「言葉」と教科「国語」の関係性と指導法に関してどう捉えているかを調査し、分析する。

2 調査方法

(1) 対象

調査は、小学校教諭と幼稚園教諭の免許取得希望（以降、A区分幼小）の大学3年生18名と、保育士・幼稚園教諭の資格・免許取得希望（以降、B区分幼保）の大学3年生29名を対象に行った。

(2) 実施時期

2019年4月23日に実施した。

(3) 手順と調査項目

幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」の部分、小学校学習指導要領国語編の目標と第1学年及び第2学年の目標と内容の部分、小学1年国語教材「おおきなかぶ」（光村図書）を資料として提示し、絵本「おおきなかぶ」（福音館書店）を実物投影機で見せた後、以下の項目について調査用紙にて回答を求めた。

- 1 領域「言葉」の特徴
- 2 教科「国語」の特徴
- 3 保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導
- 4 教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導

1及び2については、キーワードとして単語レベルで回答するよう指示した。3及び4については、

自由記述とした。

「おおきなかぶ」は、ロシア民話がもとになっている。光村図書の教科書では、1年生教材として採録されているため、教材名が「おおきな かぶ」のように分かち書きがなされている（本研究では「おおきなかぶ」と表記する）。訳者は、文芸教育研究協議会会長であった西郷竹彦である。物語では、おおきなかぶを抜くために、おじいさん、おばあさん、まご、いぬ、ねこ、ねずみの順に登場する。かぶを抜くためのかけ声「うんとこしょ、どっこいしょ。」や、かぶが抜けない時の「……、かぶはぬけません。」という繰り返されるフレーズが印象的な教材である。

(4) 処理

回収した調査用紙に記述された内容をExcelに打ち込みデータ化し、KH Coderにより特徴を分析した。

(5) 倫理的配慮

データの扱い方や処理については、学生個人の回答が特定できないよう十分配慮して行った。

3 調査結果

3-1 回答記述の語数

A区分幼小・B区分幼保のそれぞれの学生の領域「言葉」・教科「国語」の特徴として回答記述したものをデータ化し、KH Coderにより語句抽出した。A区分幼小・B区分幼保の区分ごと、領域「言葉」・教科「国語」の特徴として記述した語数がどれだけであったのかを、表1に示した。

学生の回答記述から抽出した語数は、領域「言葉」の特徴では、A区分幼小の総出語数が739、異なり語数は125であり、B区分幼保の総出語数が1339、異なり語数は154であった。他方、教科「国語」の特徴では、A区分幼小の総出語数が1037、異なり語数は216であり、B区分幼保の総出語数が1658、異なり語数は259であった。

表1の平均語数を見ると、領域「言葉」の特徴では、A区分幼小の語数平均が41、異なり語数平均は7であり、B区分幼保の語数平均が46、異なり語数平均は5であった。他方、教科「国語」の特徴では、A区分幼小の語数平均が58、異なり語数平均は12であり、B区分幼保の語数平均が57、異なり語数平均は9であった。

表1 領域・教科の特徴として記述された区分ごとの語数平均

	領域「言葉」		教科「国語」	
	総出語数	異なり語数	総出語数	異なり語数
A区分幼小 n=18	41	7	58	12
B区分幼保 n=29	46	5	57	9

この結果から、回答記述の語数としては、両区分とも領域「言葉」より教科「国語」の方が多かったといえる。

3-2 領域「言葉」の特徴

表2・表3は、B区分幼保学生とA区分幼小学生とがそれぞれ領域「言葉」の特徴として記述した回答から抽出した語を、出現回数の多いものから示した(30位程度まで)。

幼保を専門として学ぶB区分幼保学生の上位10語までは、「言葉」「する」「味わう」「表現」「楽しい」「自分」「伝える」「豊か」「感覚」「喜び」であった(表2、色塗り)。この中の、「言葉」「する」「表現」「楽しい」「喜び」「自分」「伝える」「感覚」は、A区分幼小学生の方でも上位10語までに入っている(表3、色塗り)。しかし、「味わう」「豊か」は、A区分幼小学生の方で上位10語までに入っておらず、「味わう」は同順11位、「豊か」は同順17位である(表3、色塗り)。

一方、A区分幼小で上位10語に入っていないながら(表3、太枠)、B区分幼保の方では上位10語に入っていない語として、「絵本」「聞く」がある(表2、太枠)。B区分幼保の方で、「聞く」は同順13位、「絵本」は同順30位である(表2、太枠)。

上位10語以下の出現回数の特徴的な語として、A区分幼小学生では「意欲」「態度」「経験」「関心」「興味」「考える」「力」など、小学校教育や小学校学習指導要領のキーワードに位置づけられるような語がある(表3、丸)。この7語のうち、B区分幼保学生の方でも特徴として挙がっていたのは、「意欲」「興味」「関心」であった(表2、丸)。

3-3 教科「国語」の特徴

表4・表5では、A区分幼小学生とB区分幼保学生とがそれぞれ教科「国語」の特徴として記述した

回答から抽出した語を、出現回数の多いものから示した(30位程度まで)。

幼小を専門として学ぶA区分幼小学生の上位10語までの語は、「言語」「する」「言葉」「国語」「活動」「伝える」「書く」「適切」「文化」「力」であった(表4、色塗り)。この中の、「する」「言語」「力」「言葉」「国語」「伝える」「文化」は、B区分幼保学生の方でも上位10語までに入っている(表5、色塗り)。しかし、「適切」「活動」「書く」は、B区分幼保学生の方で上位10語までに入っておらず、「適切」は同順11位、「活動」は同順19位、「書く」は同順24位であった(表5、色塗り)。

一方、B区分幼保で上位10語に入っていないながら(表5、太枠)、A区分幼小の方では上位10語に入っていない語として、「理解」「養う」「親しむ」がある(表5、太枠)。A区分幼小の方で、「養う」は同順11位、「理解」は同順18位、「親しむ」は出現回数3回で同順47位である(表4、太枠)。

上位10語以下の出現回数の特徴的な語として、A区分幼小学生では「音節」「主語」「述語」「文字」など、国語科の言語事項に位置づけられるような語がある(表4、三角)。また、「読む」「聞く」「話す」が挙がっており、上位10語に含まれる「書く」と併せて、平成29年告示小学校学習指導要領国語編の「内容」の中の〔思考力、判断力、表現力〕として位置づけられている、A話すこと・聞くこと、B書くこと、C読むことに対応している(表4、四角)。他方、B区分幼保学生では、「書く」のみが上述のように同順24位となっている。

B区分幼保学生の上位10語以下の特徴として、動詞の多さがある。「もつ」「高める」「使う」「できる」「なる」「感じる」「考える」「書く」の8語がある(表5、四角)。一方、A区分幼小の方は、「養う」「もつ」「読む」「聞く」「話す」の5語である(表4、四角)。

表2 B区分幼保学生の領域「言葉」の特徴

	抽出語	品詞	出現回数
1	言葉	名詞	71
2	する	動詞B	67
3	味わう	動詞	37
4	表現	サ変名詞	34
5	楽しい	形容詞	32
6	自分	名詞	26
7	伝える	動詞	24
8	豊か	形容動詞	23
9	感覚	名詞	16
10	喜び	名詞	15
	文字	名詞	12
	気付く	動詞	11
	もつ	動詞B	10
	イメージ	サ変名詞	10
	親しみ	名詞	10
	生活	サ変名詞	10
	聞く	動詞	10
	美しい	形容詞	9
○	興味	名詞	8
	心	名詞C	7
	相手	名詞	7
	日常	名詞	7
	話	サ変名詞	7
	なる	動詞B	6
○	関心	名詞	6
	先生	名詞	6
	想像	サ変名詞	6
	通う	動詞	6
	話す	動詞	6
○	意欲	名詞	5
	絵本	名詞	5

表3 A区分幼小学生の領域「言葉」の特徴

	抽出語	品詞	出現回数
1	言葉	名詞	43
2	する	動詞B	32
3	表現	サ変名詞	16
4	楽しい	形容詞	13
5	喜び	名詞	12
6	自分	名詞	11
6	伝える	動詞	11
8	絵本	名詞	10
8	感覚	名詞	10
8	聞く	動詞	10
○	意欲	名詞	8
○	態度	名詞	8
	味わう	動詞	8
○	経験	サ変名詞	7
	親しむ	動詞	7
	物語	名詞	7
○	関心	名詞	6
○	興味	名詞	6
	豊か	形容動詞	6
	交わす	動詞	5
○	考える	動詞	5
○	力	名詞C	5
	使う	動詞	4
	生活	サ変名詞	4
	相手	名詞	4
	美しい	形容詞	4
	文字	名詞	4
	養う	動詞	4
	リズム	名詞	3
	感じる	動詞	3
	見る	動詞	3

3-4 「おおきなかぶ」に対する指導観

A区分幼小生とB区分幼保生が、保育内容「言葉」と教科「国語」の両面から「おおきなかぶ」の指導についてどのように捉えるのかを調査した。個々の学生が記述した保育内容「言葉」と教科「国語」の指導のアイデアを比較して、両者の差異を以下の4段階で数値化した。

3…両者に大きな開きがある

2…一部分、または根底では共通している

1…ほぼ同様である

0…片方記述なし

その結果は、表6の通りである。

A区分幼小では、3段階が9名、2段階が6名、1段階が2名、0段階が1名であり、18名の平均段

表4 A区分幼小小学生の教科「国語」の特徴

	抽出語	品詞	出現回数
1	言語	名詞	26
2	する	動詞B	17
3	言葉	名詞	16
4	国語	名詞	14
5	活動	サ変名詞	11
6	伝える	動詞	10
7	書く	動詞	9
7	適切	形容動詞	9
7	文化	名詞	9
7	力	名詞C	9
	感覚	名詞	7
	思考	サ変名詞	7
	生活	サ変名詞	7
	大切	形容動詞	7
	日常	名詞	7
	必要	形容動詞	7
<input type="checkbox"/>	養う	動詞	7
<input type="checkbox"/>	もつ	動詞B	6
	想像	サ変名詞	6
	表現	サ変名詞	6
	理解	サ変名詞	6
△	音節	名詞	5
△	主語	名詞	5
△	述語	名詞	5
	知識	名詞	5
	特質	名詞	5
<input type="checkbox"/>	読む	動詞	5
	能力	名詞	5
△	文字	名詞	5
<input type="checkbox"/>	聞く	動詞	5
<input type="checkbox"/>	話す	動詞	5

階は2.3であった。B区分幼保では、3段階が16名、2段階が9名、1段階が4名、0段階が0名であり、29名の平均段階は2.4であった。それぞれの記述内容と差異について、A区分幼小は表7、B区分幼保は表8に示した。

表5 B区分幼保学生の教科「国語」の特徴

	抽出語	品詞	出現回数
1	する	動詞B	77
2	言語	名詞	28
3	理解	サ変名詞	21
4	力	名詞C	20
5	言葉	名詞	19
6	国語	名詞	18
6	養う	動詞	18
8	伝える	動詞	17
9	文化	名詞	15
10	親しむ	動詞	14
	想像	サ変名詞	11
	適切	形容動詞	11
	指導	サ変名詞	10
	内容	名詞	10
	能力	名詞	10
<input type="checkbox"/>	もつ	動詞B	9
<input type="checkbox"/>	高める	動詞	9
<input type="checkbox"/>	使う	動詞	9
<input type="checkbox"/>	できる	動詞B	8
	我が国	名詞	8
	活動	サ変名詞	8
	思考	サ変名詞	8
	態度	名詞	8
<input type="checkbox"/>	なる	動詞B	7
	よい	形容詞B	7
<input type="checkbox"/>	感じる	動詞	7
	感覚	名詞	7
<input type="checkbox"/>	考える	動詞	7
<input type="checkbox"/>	書く	動詞	7
	正確	形容動詞	7
	生活	サ変名詞	7

表6 「おおきなかぶ」に対する指導観の差異

差異段階	A区分幼小 n=18	B区分幼保 n=29
3	9	16
2	6	9
1	2	4
0	1	0
平均	2.3	2.4

※数字は実数

表7 A区分幼小小学生の「おおきなかぶ」に対する指導観

差異	保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導	教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導
3	「うんとこしょ どっこいしょ」を体で表現する 劇をする	「おとうさん」と「おおきな」の発音とその表記のちがいを誰が誰を読んできたのか(主語と述語)
3	「うんとこしょ どっこいしょ」の繰り返しを楽しむ 読み聞かせ 劇で役を演じる かぶを育ててみる 大きなかぶの写真を見せる	○おおきな ×おうきな ひらがなの書き順 バランス 物語を覚える気持ちを込めて読む
3	絵本の読み聞かせ 「うんとこしょ どっこいしょ」のところはジェスチャーをまじえながら、子どもに「みんなもいっしょに引っ張って」などと言い、絵本に入り込めるようにする	(1)読み聞かせ (2)音読 (3)登場人物の確認(全体)・(段落分け) (4)読みとり (5)まとめ (4)Q1. おじいさんはどんな気持ちでカブをうえたか? Q2. カブは何で抜けない? Q3. ぬけないカブをどうやってぬこうとしたか? Q4. どうやってカブはぬけたか? (6)カブをこのあとどうしたか、考えよう(想像してみよう)
3	・「うんとこしょ、どっこいしょ。」の言い方 ・絵本やエプロンシアターなどを通して仲間と協力して物事を達成する気持ちを身につけさせる	・音読の仕方 ・「おじいさん」「おばあさん」「おおきい」 ・かぶをひっぱっている時の人物の気持ち ・かぶが抜けた時の人物の気持ち
3	・かぶはまだぬけないのかという、わくわくさせるような気持ちを味わってもらうため、先生が気持ちを入れこみ読む ・げきなどで、おおきなかぶを題材として使う(表現や喜びを楽しむ) ・一つ一つの行動に動作をつけて、ここはこういう場面なのかと、感じてもらう ・物語を意識	・読点や句点、画を意識して音読させる ・小学校では、子どもが読んで、その人の気持ちになって考える 文の読み方を意識 物語で誰が出てきたか、登場人物の読み取りをする
3	①本文の読み聞かせ→「おおきな」や「うんとこしょ、どっこいしょ」などをおおげさに読んだり、強調したりしながら読み、子どもの興味・関心を引き出す ②おばあさん、まご、犬、ネコが加わった後に、「この後どうなると思う?」などと問いかけ、物語の面白さ、楽しさを味わえるようにする ③読み終わった後で、「大きなカブだったね。先生こんなのみたことないな。みんなはある?」などとつぶやき、子どもたちの経験や生活の中から、話、感想を聞き出す ④「なにか、大きくてぬけない物があったら、みんなで引っ張ってみようね。」と言い、今後も楽しめるようにする ⑤期間をあけて、何度も読む	①本文を教師が読む→読み方や言葉の切れ目などを知るため ②みんなで読む→しっかり読んでいるか確認 ③「おおきな」「おとうさん」読みの確認 ④登場人物の確認
3	・普段の絵本読みのように見やすい所に子どもを集め一通り絵本を読む ・「あまい あまい」や「おおきな おおきな」など2回繰り返しているところは子どもの頭に残るように強調して読む ・「うんとこしょどっこいしょ」は繰り返していくうちに子どもも一緒になって読む ・「次は誰を呼んでくるのかな?」など子どもに問いかけることで想像力をふくらませて中から、話、お兄ちゃんなどを頭の中で考えられるようにする ・絵本を読んで終わりではなく、劇など自分の身体で体験することで言葉を使う楽しさを知ることができるようにする	・一通り音読ができるようにする(クラス全体、個人) ・何度も出てきた単語に線を引く文の特徴を理解する ・かぎ(「」)の使い方を理解し、実際に自分も使えるようにする ・ノートに書く際、姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書く ・句読点の打ち方を理解し、実際に自分も使えるようにする
3	・絵本を読む ・劇をする ・強弱をつけて読む	・登場人物になりきって(おじいさん役、おばあさん役など)グループを作り読む ・教科書のイラストをコピーして拡大する ・内容についての感想や考えたことを発表させる ・どういった順番でぬいているのかを考え、捉えさせる ・読む際に、強弱をつけ大切にしているところを意識させたり、句読点や音節などの関係に気付かせる ・読むだけでなく書かせたり、話したり聞かせるようにする
3	・読み聞かせの絵本としての活用 ・壁に「おおきなかぶ」に関する絵を貼る ・生活発表会の劇 ・給食で出たかぶを食べてもらう時	・「おおきな」と「おとうさん」の言葉の違いについて指導 ・劇をする ・音読の練習 ・物語の構成を考える
2	かぶの大きさに注目させて、「おおきいねえ」など声をかける かけ声を子どもたちと読む→劇のようにして遊ぶのも◎ 絵本の読み聞かせをコミュニケーションツールとして利用しながらかわる	言葉に注目させる おおきな⇔おうきな感想指導で考えを表現する 言葉の重なりから関係性を考える 自分の言葉での表現や感想を持つ、または伝えることを軸にして、物語の中の表現や言葉そのものに関心を抱くよう指導する
2	おじいさん役、おばあさん役など、おおきなかぶになりきってみて、楽しむ かぶがぬけた時、みんなで協力して成しとげると楽しいね、と協力することの大切さに気付くよう促す	おおきな(読み、おー、おう) おとうさん(読み、おとおさん) かぶがぬけない→どうしよう 登場人物(何人?どんな人?動物?) 文節、段落はどうか 句読点の使い方 「」の使いかた
2	・先生の周りに集まってもらい、「おおきなかぶ」を読む ・読み終わった後に、誰が出てきたか子どもたちに発言してもらい ・最終的に何人かぶをぬくことができたか確認する ・ひっぱる時の「うんとこしょ、どっこいしょ。」が出てくるような質問をする ・子どもたちにどの場所をやってみたいか聞く ・それぞれ分かれて「おおきなかぶ」の劇をする	・教師が1度音読する ・1人で全部音読してもらい ・場面分けをして、登場人物が増えるごとに抜けたか確認する ・かぶが抜けたときに何人いるか確認する
2	まず、手遊び等で幼児の視線をしっかりと集めてから、「おおきなかぶ」の読み聞かせを行う。読み聞かせの際には、ゆっくりとていねいに読み、子ども達が物語を感じその世界の中に没頭していきける様にしていきたい。また、「間」もしっかりと取り、子ども達が文の内容を理解するために必要な時間を確保していきける様に工夫したいと感じている。物語の読み聞かせの後には余韻を大切に、感想を求めないという事にも留意していきたい。しかし、発達段階に応じ、さりげなく感想を聞く等、援助の仕方を変容していきたいと思う。子ども達の感想を触発させる事で、より興味・関心を引き出していきたいと感じた。読み聞かせ後の活動として絵本づくりをする事により、文字や言葉への親しみを培っていききたいと考えている	教科「国語科」としての指導としては登場人物の心情や物語の流れを捉える事が出来る様に援助していきたい。幼児期とは異なり、教師が読み聞かせを行うだけでなく、子ども達自身にも本文を読ませるという活動を大切にしていきたい。実際に自分で本文を読む事で、他者から話を聞くよりもより深く物語について考え、細かく具体的に場面を捉える事が出来る様にしていきたい。また、個人で読ませるだけでなく、ペアで交互に読んだり、グループで読んだりすることにより、文字に対する、言葉に対する親しみ、理解も深めていきける様にしたい。本文を読んだ後の感想を交流させることにより、登場人物の心情、背景、物語の流れを多面的、多角的につかむことができる様にさせていきたいと考えている。
2	・絵本を読む ・劇をする	・一斉に音読 ・段落ごとにおける ・写真や絵を使ってイメージしやすく ・登場人物の確認(特徴などを児童に言ってもらい) ・グループに分かれ、それぞれ、おじいさん役、おばあさん役に振り分け、それぞれの心情を考えて、プリントに書いてもらい→グループ交流→全体交流

差異	保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導	教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導
2	大型紙しばいや絵本などを用いて読み聞かせを行う。この時、「うんとこしょ、どっこいしょ」というセリフの読み方を大きさに言うなど工夫することで、子どもたちに面白い言葉だなと興味をもってもらう→日常生活の中で、大きなカブのシーンを真似する姿が見られたら、大きなカブごっこをして「うんとこしょ、どっこいしょ」と言いながら、カブを抜くまでの動作を楽しむ→「うんとこしょ、どっこいしょ」以外の場面を真似する姿やストーリーの流れを意識する姿が見られたら、役割りを決め、大きなかぶの簡単な劇を楽しみ、言葉に親しむ。	教師が文章を読む。この時、児童は教科書を見ているので、ゆっくり、はっきり、大きな声で読む。また、セリフは幼児同様に大きさに読むことで淡々としたものにならないようにする。児童と一緒に物語を読む。児童の様子を見ながら読むスピードを調整する。最初は、どのような物語かわかりやすくするため、挿し絵などを用いて読む。どのような物語だったか「だれがどうしたのか」など児童に問いかけながら確認する。この時、実際に児童が実演して確認する活動も行う。
1	保育者が前で椅子に座り子ども達が集まるのを待つ→本の表紙を見せ、何の絵に見えるか聞く→本を読む→保育者が「かぶ ぬけて よかったね」などと感想を言い、子どもの感想を触発する	・児童が「おおきなかぶ」を音読する ・「おおきな おおきな かぶになれ」→おじいさんの気持ちを考える ・かぶがぬけないときに、おじいさんは何をしたか ・なぜさいごかぶがぬけたのかを考える ・ぬけたときのおじいさん (or みんな) の気持ちを考える→発言する機会も設ける
1	紙しばいで「おおきなかぶ」を読む。その中で実際1, 2場面くらい実演しながら体験的に教材に触れ学ぶ。そして最後全員で劇をする	教材を先生が見本で読む。グループに別れ、それぞれ登場人物に1人1人なりきりグループごとに演じる。特に印象に残った2グループくらいを最後にクラス全体で発表してもらう。
0	本を声に出して読んでだれがでてくるのか言う かぶをどのように抜くのか体で表現する	

表8 B区幼稚園保学生の「おおきなかぶ」に対する指導観

差異	保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導	教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導
3	読み聞かせ→登場人物(誰がでてきたか) 劇 どうしてかぶは抜けた? と質問 「うんとこしょ、どっこいしょ」のリズムを楽しむ(子どもたちも一緒に言う) おおきなかぶの制作(絵、折り紙、画用紙など)	音読(読み方) 板書 句点、読点のつけ方 かぎかっこの書き方 言いまがえ、書きまがえが多い語句の確認 文の区切り 何を伝えたいのかをまとめる
3	・かぶを抜くためにはどうしたや良いかを子どもたちに尋ねる。・抜けて皆が喜んでいる場面では、皆で協力してかぶを抜けた事に対する達成感や喜びを共有出来るようにする。・かぶの大きさを示すために例を出し、大きさを自分の背で納めできるようにし、その大きさについて言葉で表せるようにする。	・句読点に注意しながら読めるようにする。・言葉の発音にも気を付けるように促す。・登場人物やその場面で行われている事などを整理しながら読み進め、物語に親しみをもちたり新しい気付きが生まれるようにする。
3	「うんとこしょ、どっこいしょ」という言葉を覚えて真似して楽しむ出てくる人物や動物に親しみをもつ 読みきかせ 絵を見てたのしむ 聞いてたのしむ 絵を見て物語を覚える エプロンシアターやペープサートを用いる	・「おおきな」「おとうさん」正しく書くこと ・文章を正しく読む。 ・文章を見る。 ・かぎかっこの使い方や句読点などの使い方 ・ひらがなを見る。 ・文章から情景を想像する。 ・文章から読み取る 家族構成など ・「ロシアのみんな」
3	・表現する楽しさが味わえるように、劇、オペレッタで表現する。 ・親しみやすく、興味が持てるように、イラストがかいてある本を読み聞かせする。 ・イメージできるように、あえて絵を見せなくて読む。 ・読み聞かせをした後に「どうだった」と感想を聞き、自分が話すことができるようにする。 ・劇をし、セリフを覚えることで文字に対する親しみが出来るようにする。 ・劇をみんなで行うことで周りの友達とのセリフを聞く力を養う。 ・あえて、絵だけを見せることで(初めに)想像力が豊かになるようにする。 ・擬音をつけて読む。 ・アニメを見る。 ・何回もくり返して読む。 ・かみしばいを作る。 ・ペープサート、エプロンシアター、で表現する。	・全員で音読をする。「。」読みをして話をしっかり聞けるようにする。 ・感想を自分の言葉で発表する。 ・他の人が話した内容を聞き、自分の意見と比べて発表する。 ・1人で声に出してよんでみる。 ・「ぬけた時のみんなの気持ちはどうかな?」など内容(登場人物の思い、作者の思いなど)について考え、発表をする。 ・内容に関する質問をし、意見を出し合う。
3	・想像する楽しさを味わう。 ・どんなに大きな力でなの自分なりに表現する。 ・助けを呼ぶときはどう言うのかを考える。	・カブを抜くのを手伝ってもらったとき、どう言えば状況が正確に伝わるのかを考える。 ・主語が何かがわかるようにする。
3	・おおきなかぶとはどんなものなのか、子どもにイメージさせる。 ・自分が感じたことを言葉で伝える。 ・エプロンシアターやペープサート等で動いているところを見る。 ・「うんとこしょ、どっこいしょ」とみんな声合わせてみる。 ・実際にかぶの代わりになりそうなのを引いてみる。	・「おじいさんが、かぶのたねをまきました。」の様に主語と述語の違いや文の構成を理解する。 ・正しい位置に、。をもってくる。 ・「」のセリフはその人物になりきって言ってみる。 ・おじいさん、おばあさん、孫、ねこ、ねずみ、ナレーションを決めて言ってみる。 「二番目にかぶを引いたのは誰か」などの問いかけに答える。 ・他のロシアのみんなについても調べる。
3	みんなで「うんとこしょ、どっこいしょ」と言葉で表現する 自分なりに考える 絵本に親しみを持つ 想像する 言葉の響き	「おおきな」を「おうきな」などと間違えないように
3	劇でやる	文章を読み、内容を読み取る
3	「うんとこしょ」など面白く親しみやすいような表現 「あまい、あまい」は想像して頭の中で味わうようにする 言葉は相手を楽しませながら、自ら気付いてできるようにする	赤線で単語の直しをしたりして勉強できるようにする。つまらなそう。教科は適切に明確にして自覚して高めるようにする ページページに補足がしてある。思いや考えを考えながら読む。
3	・「うんとこしょ、どっこいしょ」の繰り返し呼びかけ。	・全部ひらがなで表記している。 ・「おおきな」「おとうさん」などの言葉の表し方
3	・親しみをもって聞く ・言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる ・興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう ・イメージや言葉を豊かにする	・音節と文字との関係、アクセントによる語の意味の違いに気づくとともに、姿勢や口形、発声や発音に注意する。 ・長音、拗音、撥音などの表記、助詞の「は」「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ「」の使い方を理解する ・語彙を豊かにする ・文の中の主語と述語の関係に気付く ・敬体で書かれた文章に慣れる。 ・言葉の豊かさに気付く ・いろいろな本があることを知る 音読、句読点、まるよみ
3	劇 読み聞かせ おおきなかぶづくり ぬったりはったり	句読点で区切って子どもが順に読む 正しく読む 繰り返し読む 宿題として出す
3	ページをゆっくりめくり、次のページは「どんなだろう」と想像できるようにする。一緒に引く動作をすることで表現することの楽しさを味わう。絵本に親しみをもつ。見て聞く。	言葉の意味を理解する。漢字に変換できるところに線を引く。読みがなを書く。

差異	保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導	教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導
3	かぶは白いほうがいいと思う みんなでひっぱる動作をする 劇など	文字の読みと書きでまちがいがやすいものの赤線 文字が大きく子どもが読みやすくなっている カタカナにはふりがながある
3	・絵本などでおおきなかぶを読んだりするのはなく、実際に劇などで役になりきって先生や友だちと心を通わせたり、言葉表現する楽しさを味わえるようにする。 ・おおきなかぶの読み聞かせをするときは、声の抑揚をつけたりするなど工夫し、話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞くことができるようにする。	・内容を理解するために一緒に音読をする。
3	保育者が読み聞かせをしたあとに、クラスで1つ大きなかぶをつくったり、クラス全員で大きなかぶに見たてた新聞紙で抜いたりする。より物語に寄り添うことができる体験的な指導を行う。また、給食ですてくるかぶにも興味を持つように促したり、身近にかぶを感じられるようにする。	教師が手本として音読した後、丸読みをしたり、全員で音読する。その中で「おおきな」「おとうさん」などの言葉の留意点を説明する。また、実際のかぶを見せ、言葉で「真っ白ではないね」「葉に近づくと緑色になっていくよ」などと気づいた所を伝え合う活動もできると思う。
2	繰り返す面白さ なかなかぬけない面白さ 絵と文字に親しむ	けれども やっぱり まだまだ なかなか とうとう 誰が誰(何)をひっぱっているのか 文に親しむ
2	・「おおきなかぶ」の劇をする。 ・「おおきなかぶ」の絵本や紙しばいを読む。 ・おおきなかぶの絵を描いてみる。	・登場人物の言葉の意見を知る。理解できるようにする。 ・登場人物を変えたり、自分なりの物語を作ってみる。 ・音読をする。 ・おおきなかぶの話を聞いて、感想を書く。 ・なぜおおきなかぶに育ってしまったのか、考える。
2	・「大きなかぶ」を絵本にして、読み聞かせをする。「あまいあまい大きなかぶ」→どんなかぶかなと子どもがイメージしてそれを言葉で表現できるようにする。おじいさんがひっぱってもかぶはぬけないみたい→とっても大きいかぶだね「どんぐらい大きいかな?」と問いかけ子どもがイメージして想像を豊かにする。「うんとこしょ、どっこいしょ」というセリフを強調させながら、ひっぱる時は力を入れて言うとかぶはぬげるかもしれないと想像したり期待が持てるようにする。「とうとうかぶはぬけました」→おじいさん、おばあさん、まご、いぬさん、ねこさん、ねずみさんが力を合わせたら、かぶは抜けたんだね。「見て見て大きなかぶ」といい自分の想像していたかぶと比較して、もっと豊かにする。よって、このストーリーの内容をイメージしたり想像したりして楽しさを豊かにし、自分のイメージしたことを保育者と言葉を通して表現できるようにする。	「大きなかぶ」を教科書を通して音読をする。音読をしながら、このストーリーを理解できるようにする。姿勢や発音、読み方に気をつけて音読をする。音読をしながら、どんな登場人物が出てきて何をしていたのか、理解できるようにする。大きなかぶを通して、分かったことや考えたことを文字にししたり、話したりして表現をする。
2	・生活発表会などの劇で扱う ・まずは「おおきなかぶ」に興味を持てるように、絵本の時間に「おおきなかぶ」の絵本を取り入れる ・自分なりに役になりきって表現できるようにする	・まずは音読から始める ・音読の宿題に取り入れる ・授業内におじいさんの気持ちについて、全員で意見を出し合う ・間違えそうな言葉は復習できるようにする ・丸読みする
2	まずは絵本を読んで、言葉や話の内容に興味を持ってもらう。ページサートなどを使いながら、話をし、見たり、聞いたりする。絵本を聞きながら、どんな内容なのかを想像する。	自分でおおきなかぶを読み、言葉を見る。登場人物は誰であるかを考え、内容を理解する。登場人物になりきり、この場合ではどう思っていたのか考えてみる。
2	言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること 絵本や物語に親しんだり言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること 絵本や物語などで、想像をめぐらせ、楽しみを十分に味わうことによつて、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること 絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう 自分のイメージや動きを言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう	場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること
2	・「次は誰が出てくるかな?」とイメージをふくらませる。 ・みんなで一緒に「うんとこしょ、どっこいしょ。」などと同じフレーズを言う。 ・どうしたらかぶがぬげるかイメージをふくらませる。 ・かぶがぬけたあと、どうしたと思うか、自分だったらどうしたいか	・「おおきな」と「おとうさん」の似ている発音の表記のちがいに気づく ・かぶがぬけたあと、自分だったらどうしたいかを伝え合う ・仲間と協力することの大切さを学ぶ 助け合いの大切さ
2	お話に興味を持てるようにする。絵本やお話に興味を持ち、想像する楽しさを味わえるようにする。お話を聞いて、そのイメージを体で表現することが出来るようにする。	・文章を理解して、読めるようにする ・自分の思いや考えをもつことができるようにする ・身近なことをあらかず語句の量を増やし、語彙を豊かにすること。
2	紙芝居で「おおきなかぶ」の読み聞かせをする→クラスの子ども達と劇ごっこをする(オペレッタなど)→自分の役になりきりながらセリフに興味を持てるようにする ・自分の役に入り込んでイメージしたりセリフを言ったりする	まずは、教師が教科書の「おおきなかぶ」を音読する→子どもたちが教科書を丸読みしていき内容を理解できるようにする→登場人物やストーリーを通して言葉に興味を持てるようにする
1	劇をする時の題材として「うんとこしょ、どっこいしょ」をどんな感じで言うのか(保育者が気持ちを込めて) かぶはどんなものなのか 犬や猫、ねずみの鳴き方はどんなふうか 抜けたかぶでどんな事をするのか	おじいさん達の心情の変化 簡単な劇を行う(ごっこ遊びに近い)
1	「うんとこしょ、どっこいしょ」と繰り返す楽しさ・面白さ。 ・次々と登場人物が出てくる→おじいさんとの人間関係が分かる	・「うんとこしょ、どっこいしょ。」という掛け声で、かぶを抜く。掛け声と共に力を込める。 ・「～が～を引っ張り」という言葉の連鎖。 ・「～が～を呼ぶ」
1	・「あまい あまい」や「おおきな おおきな」と繰り返す言葉に対して、表現の仕方を工夫することを楽しむ。 ・「うんとこしょ、どっこいしょ」という言葉をみんなで言って楽しむ。 ・保育者が絵本の読み聞かせをしたり、エプロンシアター等で演じたりして子どもを楽しませる。 ・子どもが絵本の登場人物を演じる。	・「あまい あまい」や「おおきな おおきな」と繰り返すことで、言葉にはどのような効果があるのか考える。 ・子どもが音読をして実際に読んでみる。 ・音読をする際には、どのようなことに気をつけたいか、言葉をもとに表現したら良いか考える。 ・なぜかぶが抜けたのか考えてみる。 ・実際に子どもが登場人物を演じて、その状況を再現する。
1	・劇などを使って、表現することと話すことを味わう。 ・保育者がエプロンシアターなどをして、想像力をもってもらい(次は何がでてくるのかなど……) ・登場人物の絵などを実際に自分たちで作ったりすることで友達や先生と会話することができる ・文字を読んだりすることで文字で表現することを楽しみと思うように、子どもたちの好きな場面を自分が好きなように紙などに書いてもらう。書いた後に、掲示などをして友達同士で会話を楽しむ。	・学習発表会などがあるなら、そこでやってみることもいい ・最後にかぶが抜けた時の喜びなどを一緒に味わう ・文字や声に出すこと(音読)で、話の流れを理解してもらい ・音読などをすることで、ストーリー(話)の展開をイメージすることができる ・自分たちが好きなページの絵本を、好きなように、絵にかいてもらうことで、友だちと伝え合うことを楽しんだりする

4 考察

本研究では、保・幼・小の指導者の養成課程にある学生を対象として、領域「言葉」と教科「国語」に対する捉え方、また共通して取り上げられることの多い「おおきなかぶ」の指導法について調査、分析した。

領域「言葉」と教科「国語」の特徴に関する回答記述の語数を比べると、A区分幼小、B区分幼保ともに、教科「国語」の語数の方が多かった。これは、幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」の部分に比べ、小学校学習指導要領国語編の目標と第1学年及び第2学年の目標と内容の部分が具体的な記述となっていることも関係していると考えられる。

また、領域「言葉」と教科「国語」の特徴として学生が記述した具体的な語は、A区分小学生とB区分幼保学生との間で共通する語もある一方で、捉え方に差異が見られた語もあった。

領域「言葉」の特徴として、B区分幼保学生においてA区分小学生より特に上位の結果となった語は、「味わう」「豊か」である。B区分幼保学生が、情緒面での指導支援・支援を重視している表れと考えられる。他方、A区分小学生においてB区分幼保学生より特に上位の結果となった語は、「絵本」「聞く」である。児童文化財の一つであり具体的な教材としての「絵本」、具体的な言語活動のうちの一つとしての「聞く」との位置づけであろうと考えられる。その他、A区分小学生では、「意欲」「態度」「経験」「関心」「興味」「考える」「力」など、小学校教育のキーワードが上位に位置づいた。同じ幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」の部分を見ても、着目する言葉について、自分自身が目指す職種とそれにむけての専門的な学びの視点が反映されるということが示唆された。

教科「国語」の特徴として、A区分小学生においてB区分幼保学生より特に上位の結果となった語は、「適切」「活動」「書く」である。A区分小学生が適切さと言語活動を重視している表れと考えられる。さらに、上位10語以外の語を見ると、A区分小学生においては「音節」「主語」「述語」「文字」などのより細かな言語事項にかかわる指導内容を捉えていることが分かる。他方、B区分幼保学生の記述からは、「もつ」「高める」「使う」「できる」「なる」

「感じる」「考える」「書く」などの動詞の多さが目立ち、幼保の観点から、指導項目ではなく、子どもたちの行動に着目していることが伺えた。

次の質問として、保・幼・小で共通して取り上げられることの多い「おおきなかぶ」を題材に、保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導と、教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導について尋ねた。個々の学生の双方への回答記述を比較し、0～3までの4段階で差異を判定した。平均するとA区分小学生は2.3、B区分幼保学生は2.4であり、どちらの区分も差異がある記述内容が圧倒的に多い結果となった。その前段階で目を通した幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」、小学校学習指導要領国語編に則って書き分けなければという意識が働いた影響もあったかと考えられる。保育内容「言葉」としての「おおきなかぶ」の指導では、劇・ペープサート・エプロンシアターなどの回答が多かった。教科「国語」としての「おおきなかぶ」の指導では、「おおきな」「おとうさん」などの長音の表記に関するもの、かぎ括弧や句点・読点などの表記、人物の登場の順番、「～が～を」の主語と目的語の関係などが多かった。その中間に位置するものとして、絵本や読み聞かせや音読、動作化があった。中間に位置する回答記述が意外に少ない結果となった。このことは、遊びから学ぶという子どもの発達段階や5領域を総合的に捉え育むという幼児教育・保育への意識と、教科として知識・技能を学ぶという小学校教育に対する意識との間の段差であるとも言える。

段差を埋める活動のアイデアとして、劇・ペープサートでの人物の登場の順番と言語事項としての「～が～を」の主語と目的語の関係の学習を融合する手法が考えられる。「が」と「を」を入れ替えることで、動作化などの活動にも考えるための仕掛けができる。幼小連携での交流会などで楽しみながら行える活動であると考えられる。

5 結論

養成課程にある学生は、それぞれの専門に沿った学びを蓄積し、将来就きたい職業に必要な資質・能力の獲得にむけて準備段階にある。本研究で行った幼稚園教育要領や小学校学習指導要領などに関して

A

おおきなかぶ
 おじいさんが
 おばあさんを ひっぱって、
 おばあさんが
 まごを ひっぱって、
 まごが
 いぬを ひっぱって、
 いぬが
 ねこを ひっぱって
 ねこが
 ねずみを ひっぱって、
 「うんとこしょ、
 どっこいしょ。」
 とつとつ、
 かぶは ぬけました。

B

おおきなかぶ
 おじいさんを
 おばあさんが ひっぱって、
 おばあさんを
 まごが ひっぱって、
 まごを
 いぬが ひっぱって、
 いぬを
 ねこが ひっぱって
 ねこを
 ねずみが ひっぱって、
 「うんとこしょ、
 どっこいしょ。」
 とつとつ、
 かぶは ぬけました。

の捉え方や「おおきなかぶ」についての具体的指導に関して、幼稚園教諭・保育士の養成課程にある学生と、幼稚園教諭・小学校教諭の養成課程にある学生とでは共通性と差異性が見られた。幼小連携の観点から、あるいは子どもの発達を総合的に捉える観点から、養成段階や現場において、それらの共通性と差異性を意識できるような交流が必要である。養成課程においては特に専門性の獲得に努めながらも、指導に対する先入観や構えを持つことがないよう柔軟な指導・援助の在り方を身につけさせていきたい。

引用文献

- 厚生労働省, 2017, 保育所保育指針, フレーベル館.
 文部科学省, 2017, 幼稚園教育要領, フレーベル館.
 内閣府・文部科学省, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, フレーベル館.
 西郷竹彦, おおきなかぶ, 小学国語 一上 かざぐるま, 光村図書, 2015.
 トルストイ再話, 内田莉沙子訳, 1962, おおきなかぶ, 福音館書店.